

平成21年3月31日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18730381

研究課題名（和文） 地域社会における資源交換と相互協力

研究課題名（英文） Social Exchange and Cooperation in Local Communities

研究代表者

辻本 昌弘（TSUJIMOTO MASAHIRO）

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90347972

研究成果の概要：

地域社会で行われている講集団の調査を実施するとともに、資源交換・相互協力に関する比較研究を行なった。

講集団については、評判にもとづく交換相手の選択が非協力を抑制すること、資源獲得に不確実性がある状況下で、非協力者に対する一定の寛容性が生じることを明らかにした。

比較研究としては、さまざまな民族の資源交換を比較するとともに、地域社会の祭礼集団について調査を実施し相互協力を促進する要因を検討した。

交付額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 700,000   | 0       | 700,000   |
| 2007年度 | 600,000   | 0       | 600,000   |
| 2008年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 1,900,000 | 180,000 | 2,080,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的交換，協力行動，フリーライダー問題

## 1. 研究開始当初の背景

人々が、資源をあたえあい協力しあえば、個人では不可能なことを可能にすることができる。地域社会において、資源交換や相互協力が活発になれば、災難や不運にも対処できるようになる。

しかし、合理的選択理論や社会的ジレンマ研究によると、たとえ資源交換により望ましい状態を実現できるとしても、資源交換が成立するとは限らない。資源交換には、フリーライダー問題（他者の協力にただ乗りする非協力者の発生）があるからである。

フリーライダー問題を解決するために、外部権力が介入したとしても、介入が地域社会の実情にそぐわなかったり、住民の自律性を低下させたりする可能性がある。

他の解決策として考えられるのは、地域社会で長い時間をかけて歴史的に培われてきた資源交換を活用することである。このような資源交換には、フリーライダー問題を解決し、相互協力を実現していくための知恵が秘められているはずである。

地域社会で歴史的に培われてきた資源交換を、社会心理学の立場から解明することを目指して、本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

地域社会で歴史的に培われてきた資源交換である講集団 (rotating savings and credit association) を、本研究の機軸とした。

講集団は世界各地から報告されている資源交換組織である。講集団で

は、参加者が定期的に掛金を支払ってファンドをつくり、そのファンドを各参加者が順番に受領していく。通常は数十人の参加者で結成するが、説明の便宜のために参加者が3名の場合を例にすると、講集団の交換形式は以下ようになる（A、B、Cは参加者を示し、矢印は掛金の動きを示す）。

(B、C) → A

(A、C) → B

(A、B) → C

この交換形式からわかるように、講集団は各人の資源を特定人物に集積して有効活用を図るものである。

しかし、講集団の成立は自明のことではない。講集団には、ファンド受領後の掛金不払いというフリーライダー問題があるからである。ファンド受領後の掛金不払いを抑制できないのなら、講集団は成立しない。

以上をふまえて、本研究では2つの研究目的を設定した。第一の目的は、講集団に関する調査と分析を行い、フリーライダー問題の解決について検討することである。第二の目的は、講集団の理解を深化させるとともに、研究の射程を拡張するために、日本国内さらには世界各地の資源交換や相互協力について比較研究を行うことである。

## 3. 研究の方法

日本国内において講集団が活発な地域は沖縄県である。本研究では、沖縄県にて社会調査を実施し、同一事例の長期的な追跡調査を行った。

これと平行して、社会心理学の理論モデルをもちいた講集団の分析を進めるとともに、シミュレーションを用いた分析にも着手した。

また、比較研究として、世界各地の資源交換や相互協力に関する資料を収集し、講集団との異同を検討した。とくに農耕民と牧畜民との違いに着目し、環境や歴史と資源交換の多様性との関連を探った。

さらに、講集団以外の相互協力も研究射程に含めるために、秩父地方の祭礼集団について調査を実施し、伝統を継承していく住民の相互協力について検討した。

#### 4. 研究成果

研究成果は、講集団の分析と、資源交換や相互協力に関する比較研究に大別される。

##### (1) 講集団の分析

沖縄における講集団の調査から以下の点が明らかになった。

講集団では、評判にもとづく交換相手の選択が行われている（非協力者とは交換を行わない）。交換相手の選択により、非協力の発生が抑制される。それと同時に、講集団では参加者が情報を交換しあっており、交換相手の選択に必要な評判が発生・流通する場にもなっている。つまり、講集団を行なうことにより評判が発生・流通し、この評判にもとづく交換相手の選択により非協力を抑制するという循環的なプロセスがある。また、講集団では、独特の技術が歴史的に培われてきており、このことが講集団を可能にしている（辻本・國吉・與久田，2007）。

ただし、資源獲得に不確実性がある状況下で、交換相手の選択を厳格に執

行しすぎると、交換相手がいなくなり、講集団を行なえなくなる。講集団を行なうのは、富裕者とは限らない。生計が苦しく資源獲得に不確実性のある人々も講集団を行っている。そのため、講集団における交換相手の選択では、非協力者に対する一定の寛容性も必要になる。事例研究では、一時的に掛金を支払えなくなった参加者は寛容に扱われており、不払いを頻発する者のみが交換相手の選択により講集団から排除されていた（辻本，2008）。

さらに、シミュレーションによる講集団の解析に着手した。現時点までの結果では、評判にもとづく交換相手の選択等があれば、非協力者の発生をかなり抑制できるが、非協力者が完全に消滅するわけではない。このことは、非協力者の発生が一定程度あったとしても講集団が存続できることを示唆している。このメカニズムに関する分析が必要であることが明らかになった。

##### (2) 比較研究

人類の生業様式は、狩猟採集・牧畜・農耕の3つに大別される。本研究では、おもに東アジアの農耕民と東アフリカの牧畜民をとりあげて、資源交換の比較を行い、以下の点を指摘した。

牧畜民の民族誌では、個人の独立姓が顕著となり、個人関係にもとづく交換がしばしばみられる。一方、東アジアの農耕民の民族誌では、集団による規則に則った交換がしばしばみられる。牧畜民・農耕民といえども、それぞれが多様であるが、講集団のような集団による規則的な資源交換は、移動性が低く一定地域に多くの人々が暮らす農耕民と親和性が高いと考えられる。資源交換の多様性は、環境への

適応として生じている側面がある。ただし、それぞれの資源交換には独特の技術が歴史的に培われてきており、環境に還元できない独自性も存在している。

また、秩父地方の祭礼集団の調査からは以下の点を指摘した。

少子高齢化の進行や、住民の経歴・生活の多様化が生じており、このことが伝統の継承を困難にしている。その一方で、時代の変化に対応するために祭礼集団の組織化に工夫がみられること、祭礼集団の活動にみられる相互依存関係の特徴などが、伝統を継承していく住民の相互協力を促進している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. 辻本昌弘. 社会的交換の生成と維持：沖縄の講集団の追跡調査. 東北大学文学研究科研究年報, 58, 113-129, 2008. 査読無
2. 辻本昌弘・國吉美也子・與久田巖. 沖縄の講集団にみる交換の生成. 社会心理学研究, 23, 162-172, 2007. 査読有

[学会発表] (計2件)

1. 辻本昌弘. ナラティブと生活実践. 日本質的心理学会第5回大会(研究交流委員会企画「ナラティブ・アプローチの向こう側：質的研究の豊饒化に向けて」), 2008年11月30日, 筑波大学.
2. 辻本昌弘. 地域社会の歴史と相互協力. 日本質的心理学会第4回大会(大会シンポジウム「聞くこととしての時間—生きた時間の記述」),

2007年9月30日, 奈良女子大学.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

辻本 昌弘 (TSUJIMOTO MASAHIRO)  
東北大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：90347972

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：